

「青春時代」

川尻順一

化学の卒業生としては少し異色の放送・出版という仕事をして来たので、学生たちの進路に直接役立つ話は出来そうに無い。

そこで、自分の生きざま、やってきた仕事などを「青春時代」をキーワードにして雑談風に話し、こんな先輩もいたことを知ってもらふことにする。

1) 信州大学時代

私が歩いて来た放送と言う分野は、ある程度の力があれば、やりがいのある、実に面白い世界だった。こんな素晴らしい職業に出会えたキッカケを振り返ってみると、信州大学の学生時代にたどり着く。

当時はまさに就職難の時代、化学分析ならどこの工場でも必要だろうと安易に考え、化学を選ぶ。入学後、気楽な気持ちで入った演劇部、そこはリーダーだった熊井啓氏（後に映画監督。今年5月逝去）が卒業し、質量ともにまさに潰れそうな危機に直面していた。リーダーの一人として存続目指して頑張るうちに、創造する魅力に引き込まれ、友人にも恵まれて、4年間びっしり芝居に取り組んでしまった。

本職の化学も、授業には一応真面目に出席し、試験も一夜漬けで乗り切って、なんとか卒業にこぎつけた。

化学薬品の会社の試験に失敗、創造の世界目指して当時新しい段階に入ったテレビへと民放を受験したがこれも失敗。ようやくコネでガラス会社の研究所に入り、落ち着きかけたある朝。「偶然」新聞広告が目にとまる。NHKが新しく教育テレビを始めるに当たっての要員募集で、番組制作には、科学と言う部門があった。この偶然に運を感じ人生の賭けにでた。ここで落ちたら一生化学の世界で生きて行こうと。百数十人の応募に対して5人の理科系出身者が合格。かくしてディレクターとしての青春時代が始まった。

2) 作品の中の青春とサリドマイド

制作に関わった、ある青春時代をビデオで紹介。(80分の作品を20分に編集)

「NHK特集 旅立とう、今～こずえさん二十歳の青春」

(1981年1月12日成人の日の午後7時半から総合テレビで放送)

視聴率27.9%、この年の芸術祭優秀賞など多数の賞を受賞した番組。

母親がドイツで開発された睡眠薬・サリドマイドを飲んだため、吉森こずえさんは生まれた時両手がなかった。彼女がいろいろな困難と闘いながら、短大に

進み、手に代わって足を使って、料理や洗濯をこなし、明るく前向きに生きる姿を描いた12年間の記録である。

悪魔の薬とも呼ばれるサリドマイドは最初は「てんかん」の痙攣を押える薬として開発された。1957年に睡眠薬として発売されたが、4年後レント博士が奇形が生まれると発表。世界各国では直ちに発売停止、回収が始まるが、日本では回収が始まるのは294日後のことであった。

1965年イスラエルの医師がハンセン病患者の鎮痛剤として使ったところ皮膚の症状が改善され、これを契機にエイズ、ガンなど、いろいろな病気に対する研究がはじまり、成果も上がりつつある。

日本でも多発性骨髄腫の治療薬として製造販売の申請が製薬会社から出された。サリドマイドは今後再びいろいろと議論されるに違いない。

3) ディレクターとしての青春時代

ディレクター時代には数えられないほどたくさんの番組を作って来た。はじめは番組作りの腕を磨いて、いつかドラマを作ってやろうと考えていた。ところが理科教室と言う学校向けの番組からスタートして、子供向けや一般向けの科学技術の驚異や大自然の素晴らしさを見せる番組を作っているうちに科学の世界の面白さに、はまって行くことになる。

NHKに入って8年目(1967年)「黒い画面」というドキュメンタリーを作った。放送批評懇話会の期間選奨、科学放送賞など初めて受賞した作品である。ボーイング707が富士山の近くで墜落し、乗員乗客124人全員が死亡したBOAC航空機事故の謎を追跡した番組。現場から簡単な8ミリフィルムのカメラが発見され、そこに残っていたカラーフィルムに墜落直前と思われる窓の外の風景と墜落の瞬間の黒い画面とその直後のシートと思われる色が写っていた。

このフィルムを科学的に分析して飛行機の飛んだ道筋と原因を事故調査団が解明した。まさに事実は小説よりも奇なり、偶然その瞬間を写していた人がいたのである。

この番組を皮切りに科学ドキュメンタリーという分野の作品を制作して行くことになる。ガン、心臓、宇宙、環境、といったテーマを、科学技術の光と影、挑戦する科学者グループといった視点で取り上げて行った。

化学の出身としては異色だったが、自然科学と言う角度で見れば、科学番組に取り組んで来たのは結構まっとうな道を歩いてきたのだと実感する。私たちが開拓してきた科学番組は見事に花が開き、現在後輩たちがそれを引き継いでくれている。

4) 第三の青春時代～現在

私は道に迷ったとき学生時代に読んだ、サマーセットモームという人の書いた自伝的長編小説「人間の絆」の中の主人公の人生の指針とした言葉を思い出した。曰く「自分の好きな事をやれ、但し“かどの交番”を忘れずに」である。今、私は第三の青春時代。それは演劇である。かつて潰れそうな演劇部を後輩につなげたいと頑張った4年間の夢は見事にかなって、信大演劇部劇団「やまなみ」は近く135回公演が行われる。われわれ演劇部OBは10年程前から芝居を始めているが、来年三月には松本市制百年記念のイベントとして、新作の安曇野の義民一揆、中萱加助の物語を上演する。私も役者として現在稽古の真っ最中。これには松本の色々な劇団が出演するが現役の信大演劇部の学生も参加している。学生時代の夢が半世紀を越えて共演と言う形で実現するのは、私にとって大変感動的な事である。

今年亡くなった作詞家阿久悠氏が「青春時代」という歌の中で言うように「青春時代が夢なんて、後からしみじみ思うもの」である。聴衆である学生の皆さんが後から思い出した時“素晴らしかった”と思える様な青春時代を過ごされることを心から願っている。